

【地域連携報告】

水田美術館における地域連携活動と学生教育の事例

—— 展覧会開催報告にかえて ——

紫村裕美*

キーワード：水田美術館、地域連携活動報告展、地域連携、学生教育、アクティブラーニング

1. はじめに

城西大学水田美術館（以下、「当館」とする）は、本学創立者水田三喜男が蒐集した浮世絵を中心とする近世および近現代の絵画コレクション（以下、「水田コレクション」とする）を母胎に、昭和54年（1979）3月に本学水田記念図書館8階に創設された。開館以降、入学式、卒業式、大学祭（高麗祭）など特定日において水田コレクションを公開する活動に重きを置いていたが、平成23年（2011）12月、現在地（正門付近）に構えを移し新装開館してからは、水田コレクション展に加え、地域の歴史や文化、あるいは地域作家を紹介する展示、近隣自治体との連携による展示活動も展開し、地域や社会と連携する施設としての役割を担ってきた。近年では大学附属施設の意義にも着目し、教員と連携を図りながら学生教育へ繋がる企画展示を積極的に行うなど、幅広い活動実績を積み上げている段階にあり、学内教育に資する場所のひとつになりつつあると言えよう。

そうした「地域連携」「学生教育」両者の要素を取り入れた活動事例として、令和3年（2021）7月に開催した「地域連携活動報告展－開かれた大学にみるまちづくり、ひとづくり－地域共生・協創への取り組み－」（以下、「本展」とする）がある。本展は、以前より構想としてあり、毎年開催される展覧会となるよう令和4年（2022）度以降の開催を目指していたが、新型コロナウイルス感染症の懸念から2021年度の展覧会がひとつ延期になった事もあり、本展が継続しての開催可能な展示となるかどうか、延期により空いた時期に試みとして行う事になったのが経緯としてある。本稿では、活動事例の紹介および開催報告をするとともに、開催により得られた本展の意義と課題についても触れていき、継続開催の可能性を探っていきたい。

2.1 展覧会について

本展は、7月5日（月）から16日（金）までの2週間を会期に設け、当館2階ギャラリー2の展示室を会場に開催された。[図2.1]掲げた開催主旨には、「本学の地域連携活動を通して、学生が地域とどのように向き合い、そして自身の学びの中に吸収していったか、活動内容と学びの過程をパネル中心で紹介していく」とあげている。また、本展で紹介した活動内容は、次のとおりとなる。経営学部 石井龍太准教授の「ローカルヒーロー」による研究+教育+地域貢献 [図2.2]、薬学部医

* 城西大学水田美術館学芸員

療栄養学科の“日本で唯一の薬学部で管理栄養士を養成する城西大学薬学部医療栄養学科の地域連携の取り組み”[図2.3]、現代政策学部 庭田文近准教授の“現代政策学部庭田研究室による地域連携の取り組み”[図2.4]、理学部化学科 石黒直哉教授の“理学部化学科環境生命化学研究室 卒業研究としての地域連携活動”[図2.5]、経済学部 勝浦信幸客員教授の“地域連携PBLによる学生たちの変容”[図2.6]、短期大学 三國信夫准教授の“短期大学「地域連携Ⅱ」が目指すもの”[図2.7]、以上、6つの取り組みである。

ひとつの取り組みにつき、A1サイズ(84.1cm×59.4cm)のパネル6～8枚が使われ、文章とともに、活動内容をはじめ、実績を示す写真や図版あるいは新聞記事などが盛り込まれている。さらに、学生が制作した成果物の展示や活動内容が分かる動画の上映も行い、実物資料と映像からも本学の地域連携活動を知る事が出来る展示とした。

なお、話は少々逸れるが、これらパネルや広報物に係るデザインに関しては、当館事務室でデザインを担当する職員が1名で対応にあたり作成している。[図2.8] マンパワーを考慮すると業務負担は今後の課題となるが、外注にした場合、デザイン修正や内容の伝達にタイムラグおよび齟齬が生じる事態がまま起こる為、デザイン業務をこなせる者が内部にいと、「即時性」「意図の汲み取り」という側面で有利である。

本展観覧者数は合計312名で、その内訳は、一般91名、教職員35名、学生73名、高校生以下56名、授業見学では学生53名、教員4名に見学頂いた。なお、会期中の7月11日(日)にはオープンキャンパスが実施されており、参加した高校生や御父母の方々に本展をご覧の機会にもなった。2週間という短い会期を考えれば、小規模館に相当する当館としてはまずまずの数字であったと思われる。

2.2 関連企画について

本展の関連企画には、各取り組みに関わった学生達による一般向けの展示解説を行った。展覧会準備段階で、教員に依頼をし、解説を担当してくれる学生の選定と学生への打診をお願いした。ただし、日程については、学生は本業となる授業や実験、さらにはアルバイトなど優先すべき活動があるため、すべての解説を同日に実施することは時間調整上難しい点、また、一般参加者の聴き疲れへの配慮および感染対策も鑑み、2日間で3つずつに分けての解説となるようにした。

これらの調整を経て、開催日を7月7日(水)と14日(水)の午後3時～午後4時とし、前者に薬学部医療栄養学科、経済学部、理学部化学科の学生、後者に経営学部、現代政策学部、短期大学の学生に担当してもらう事となった。担当人数は、ひとつの取り組みに対し1～2名で、内訳は、2年生から院進学を目指す4年生までの学部生に加え、院生も解説を行った。[図2.9～2.14]当日は、参加者に合わせて臨機応変に内容を変えながら話す学生、あるいは予め用意していた原稿を読み上げながら話す学生など、解説に臨む姿勢は様々であった。

参加者数は、7日が一般3名、学内12名、14日が一般9名となり、学生にとっては教員や同じゼミ仲間がいる授業での発表とは異なる状況下であった事から、自身の解説の良い面、悪い面など色々と気付きのある機会になったのではないだろうか。

なお、この学生解説に関しては一般向けだけでなく、高校生向けにも行われた。[図2.15]川越に

ある城北埼玉中学高等学校フロンティアコース学科で学ぶ高校1年生24名が課外活動の一環としてプレゼンテーションを学ぶ事を目的に本展を見学し、年齢の近い学生達から直接説明を聞くというものであった。

この見学会については、後日、当館作成のアンケートにもご協力を頂き、参加した24名中18名から回答を頂いた。見学会の感想について、一部をここで紹介しておく。

「城西大学は地域から独立している訳ではなく、さらに連携をして活動していることにとても感激しました。」

「大学生の方々が個人的な質問にも真摯に対応して下さいだったので、城西大学に好印象を持ちました。」

「今回の見学は、地域との連携や環境などの身近なものを追求する大切さを学びました。」

「パネルのくわしい説明やパネルに対しての質問に丁寧いに答えてくれて分かりやすかった。展示の実物があるとそれに対してイメージがし易かったので、見てておもしろかった。」

「全体的にとっても良かったです！とても有意義で、それと同時に勉強になる時間になりました。キャンパスもとてもキレイで、とても良い大学だなと感じました。」

(原文ママ)

高校生達が、本展を通して大学での学びの一端を垣間見る事が出来た様子は、アンケートからも了解できるであろう。

3. 本展開催の意義と課題

この章では、本展開催を通じて得られた意義と、同時に見えてきた課題について述べ、継続開催への道筋を模索したい。

本学の地域連携活動については、教員のSNSやホームページをはじめ、投稿媒体、紙面、新聞・テレビ・ラジオといったメディアの取材、動画配信あるいは大学広報等から発信しているところであり、また、大学サイト内、「地域連携センター」¹のページ上でも活動の一部を紹介している為、比較的容易に把握する事は出来る。そうした中で、本展を開催する意義を挙げるとすれば以下の点になると思われる。

- ①パネルおよび実物展示による活動内容の「見える化」
- ②ポスター、チラシの作成および周知による広汎的な学内外への「広報」
- ③「アクティブラーニング」「学生間交流」への一助

まず、①について、これは第2章1節でも述べた通り、文章と写真や図版などを使って、デザイン

1 サイトURL:https://www.josai.ac.jp/lifelong/medical_welfare.html

性の高い、見栄えするパネルに仕上げる事で、鑑賞に耐え得る展示物になるという利点がある。さらに、パネルという「モノ」として残る為、会期終了後、必要であれば、これらパネルを別の場所で再び展示する事も可能となろう。

②については、一般来館者も訪れる美術館で展覧会として紹介すれば、学内や関係者だけでなく、活動を詳しく知らない方々にもご覧頂く事で大学広報へと繋がり、活動内容への興味から本学への入学志望の契機となる可能性も生まれるのではないだろうか。現在当館では、DM登録約1,140件、近隣自治体や図書館、県内外の美術館・博物館関係機関約200件の広報先へ、展覧会ごとにポスター、チラシを送付して周知を行っている。本展に関しては、地域連携部署のある近隣他大学にも広報物を送付した。なお、教員連携企画展示の際には、教員が作成した送付先リストを頂き、それも追加して送るようにしている。これまでに蓄積された美術館広報網を利用する事で、より広範囲に案内する事が可能となる。

最後の③であるが、第2章2節でも述べたが、本展関連企画として行われた学生による展示解説は「アクティブラーニング」に該当する。いかに「分かり易く」「要点を」「簡潔に」説明できるかが解説に求められており、学生は活動内容全体を把握し、かつ、伝えたい・伝えるべき点が何かを理解していなければならない。一般向け解説は、ゼミでの発表とは異なり、地域連携活動についての知識を持たない参加者を前提にして臨む事になり、参加者から出てくるであろう質問も想定する必要がある。また、事前準備やシミュレーションを十分に行ったとしても、本番では思い描いた通りに進むとは限らず、臨機応変に対応する場面も出てくる。学生達は、展示解説を通して、話す内容、解説の進め方、質問への対応を自らの頭で考えていく力を身に付けていく事となる。

さらに、本展のように複数の活動を紹介する事で、他学部の学生がどのような活動を通して学んでいるのか知る事が出来るので、学際的な視点に立って自己の学びや研究に向き合う機会にも繋がると期待される。学際的研究という点で言えば、地域連携活動の報告に留まらず、学長所管研究についても当館で展示として「見える化」すれば、教員の研究を学内外に示す事にもなる為、こちらの開催についても今後検討する余地は十分にある。

以上が本展開催の意義となるが、一方で、開催により見えてきた課題もあるので述べていく。本展は、試験的な開催という事から、まず、昨年2月に行われた地域連携活動意見交換会で発表された活動に着目し、発表した教員を中心に展示協力の交渉を行った。パネル作成にあたって必要な素材はこの意見交換会時に使われた発表資料をベースにした為、開催の方向が決まった4月から会期となる7月までのおよそ3ヵ月という短い準備期間でも、大きく難航する場面に出くわす事なくパネル製作と広報物作成へ進める事が出来た。これを、今後本格的に継続開催していくにあたって、次の課題が出てくると思われる。

- ①開催時期
- ②開催会場

①開催時期について、今回の展示は、予定していた展覧会の延期により空いた隙間期間に充てたので、7月の2週間という会期になったが、開催時期については部局間調整および大学行事を考えた上

で改めて考えていく必要があるだろう。特に地域連携センターとの関わりは重要で、センター主催の報告会が例年10～11月頃に行われる傾向にあるので、この報告会にかかる時期にする、あるいは報告会以降年度末までの間、もしくは履修登録やゼミ決めの参考に新年度4月の開催も視野に入れて良いかと思われる。その他、高校生や御父母に見てもらえるよう、オープンキャンパス日程も考慮していきたいところである。

続いて、②の会場についてであるが、今回の展示は隙間展示の開催であり、会場も空きの出た2階ギャラリー2と当館の中では一番広い展示室を使えた為、6つの活動を紹介する場所として適していた。加えて、開催まで3ヵ月という短い期間の中で準備を進める事が出来たのも、意見交換会時の発表資料をもとにパネル作成出来たからである。継続開催する場合、どのくらいの活動を紹介するか、あるいは出来るかによって会場を考えていく事になると思われる。あるいは、予め会場はこちらで設定し、そこでの展示規模を勘案してから教員へ交渉していく方が準備を進め易くなると思われるので、どちらのアプローチが良いか様々な意見を募りながら考えていきたい。

4. おわりに

本稿では、「地域連携」「学生教育」を示す活動事例として本展を紹介してきた。展覧会全体を振り返れば特段のトラブルなく閉幕を迎えたと言えるが、あくまでも試験的なものであり、今回と同じような手順、準備期間、展示規模で継続して開催出来るかと判断するのは早いだろう。ただし、今回の目的のひとつには地域連携センターとの部署連携が取れるかという事も含まれていたもので、この点についてはいくつか課題を残しつつもクリア出来たのではと思われる。

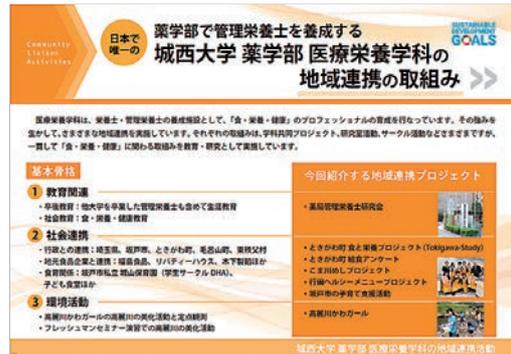
また、新型コロナウイルス感染症の収束がまだまだ不透明にある中、それぞれの地域連携活動自体に様々な制限が課されており、目標とする毎年での開催が可能かは不確実と言える。しかしながら、本学の教育研究を広く内外に「見える化」して示す事の出来る場所は、学内において当館以外ほぼ無いのが現状であると思われるので、当館としても本学地域連携活動にアンテナを張りつつ、地域連携センターや教員とのさらなる連携向上を図り、本展が今後も開催されるようスタッフ一同尽力していく所存である。地域連携活動に携わる教員においても、当館での展示をご検討頂き、本展を見越した活動記録（写真や映像、成果物）にご留意頂きながら、本学の教育研究活動活性化の媒体として当館を利用して頂く事を願い、本稿を締めくくりたい。



〔図2.1〕 展示風景



【図 2. 2】石井准教授パネル



【図 2. 3】薬学部医療栄養学科パネル



【図 2. 4】庭田准教授パネル



【図 2. 5】石黒教授パネル



【図 2. 6】勝浦客員教授パネル



【図 2. 7】三國准教授パネル



【図 2. 8】展覧会チラシ 左一表面、右一裏面



[図 2. 9] 石井ゼミ生



[図 2. 10] 薬学部医療栄養学科院生



[図 2. 11] 理学部化学科学生



[図 2. 12] 庭田ゼミ生



[図 2. 13] 勝浦ゼミ生



[図 2. 14] 短期大学学生



[図 2. 15] 高校生による見学会